

2022年ブカレスト大学日本語教育シンポジウム

日本語再発見－日本語教育の現場から－

2022年3月11日（金）・12日（土）

* 時間はすべてルーマニア時間（GMT+2）です。

3月11日（金）

10:00 – 12:15 一般発表1

コミュニケーションのための文型指導再検討

－「文脈化」・「個人化」の観点から－

川口義一、早稲田大学、言語・生活研究所、日本

現在の日本語教育は、コミュニケーション・アプローチを教授法の基本として、*can-do statements* の記述によって機能主義的なコミュニケーション活動を可能にすべく学習者を導くように設計されている。しかし、教育現場では、主に教科書や教材の編集上の不備によって、実際にコミュニケーションができるように設計された授業を展開するのは困難になっている。これは、教材の作成者が、本発表者が言う文法項目の「文脈化」を行わず、誰が誰に向かって何のために、わざわざ特定の文法・語彙を使ってコミュニケーションを組み立てるのかという課題を議論せずに教科書を作っているせいである。そこで、現場では、個々の教師が指導項目の1つ1つについて改めて特定項目のコミュニケーション上の機能をしっかりと再検討して、授業に臨まなければならない。

本発表では、初級の教科書に必ず登場する「授受動詞」の文型を例に取り、それが実際のコミュニケーションではどのように現れてくるはずかを「文脈化」の理論を持って再検討する。それによって、教科書の例文や練習問題の不備を補って、教師がいかにかコミュニケーション教育の質を上げて、表現の「個人化」を保証していくことができるかを論ずる。

日本語教育における運動、健康とは

清水泰生、同志社大学、日本

本発表において、留学生教育、日本語教育の健康における関わり合いと重要性について指摘したい。

外国人の日本語学習者に、日本語教材で日本の健康法、運動、食文化、食事について紹介されている。特に中級上級では必ずと言っていいほど掲載されている。ただ、テキストの記述の一部は医学的に妥当性があるかどうか疑問であると思われる。

それから、中級、上級の授業で自分の国の健康法との比較をさせるなどの学習活動をすることがあるが、医学関係者等との連携が不十分でありその話し合われたこと（内容）の妥当性について、十分に検討しているとは言い難い。

それから、留学生、日本語教師をはじめ、日本語教育に関わっている人は運動、スポーツに関心がない、もしくは、しない人が多い。一方、食べ物、グルメに関心がある教師が多い。ゆえに、日本語教育に関わっている人は肥満やメタボになりやすい。最近では運動することによって脳の活性化、セロトニンが多く出て留学生にとって精神の安定に有効である。そして、日本語教師をはじめ、日本語教育に関わっている人の肥満、メタボ解消になるであろう。以上、健康のために外国人留学生、日本語関係者は運動をすることが大切である。

オンライン日本語教育での社会につながる 教室活動での学習者の意識とその変化について

横田隆志、北陸大学、日本

本研究は、オンラインで行った大学での日本語科目「社会につながる教室活動」での学習者の意識とその変化についての調査である。学習者は教室活動ではどのような意識を持ちながら取り組んでいたのか、またどのように変化したかをインタビュー調査から明らかにした。

新型コロナウイルス感染拡大防止のための教育として世界中でオンラインでの遠隔授業が行われている。日本語教育をオンラインで行うことに関しては短期間に様々な方法が生み出され、オンラインならではの日本語教育が世界各地で行われるようになった。しかしながら、日本での体験や日本で生活をしている人々との交流、つまり、「日本社会につながる教室活動」はオンラインでは非常に難しい。しかし、オンラインでも学習者が教室外の人々と関り、日本社会とのつながりを持つことができるような活動を行った。

オンラインで実際に日本にいない学習者に対して、日本の社会とのつながりを意識した教室活動はできたのであろうか。学習者に「社会と関わる」というような意識がなければ、教室活動は「社会に参加している」とは言えない。一年間のオンライン授業で学習者はどのような意識で日本社会につながろうとしたのか、そしてその意識はどのように変化したのかをインタビュー調査から明らかにした。

今回の調査ではオンライン授業で学習者は日本にいなくても日本社会に関わっているという意識があったことが明らかになった。また、日本人やクラスメートとの交流を通じて、交流しながら学ぶことによるメリットも感じていた。オンラインでのバーチャルな空間も日本のコミュニティであり、そこでの交流を通じて、日本社会に関わることができることが示唆された。

Online Challenges in Pandemic Era's Isolation – Examples of Japanese Literature and Civilization New Teaching Methods at the University of Bucharest

Alexandra-Marina GHEORGHE, University of Bucharest, Romania

The present study is focused upon the challenges that we came upon during the Pandemic restrictions which moved our entire activity in an online environment. A major issue consisted of the way we could overcome the learners' difficulty in obtaining the materials they needed for the online classes. Teaching Japanese Civilization and Literature during an ongoing global crisis at the University of Bucharest was seriously affected by the impossibility to access the libraries as well as by a complete relocation of the entire format in a digital world which had not been used so much before the crisis. One major challenge

which derived from the new working environment was the proper selection of sites which provided reliable information. Within this context – a *chart of standards* had to be created, according to the complexity of content, date of issue, fame and reliability of the producer. Another major challenge was given by the fact that we had to find some sites which met the Japanese language proficiency of our students, as well as the complexity of a genuine cultural context. Some of the most reliable sources were discovered on the website of the Japan Foundation, Virginia University and as far as literature was concerned – we found *aozora bunko* as one of the most reliable source. We also had the chance to use some of the recently uploaded documentaries on the You Tube Channel. The main target of the present study consists of a general presentation of the digital environment which was used by both students and teachers from the University of Bucharest during our classes of Japanese Literatures and Civilization, as well as by the conclusions we drew from these challenges which we had to overcome in a new working environment.

13 : 15 – 15 : 30 一般発表 2

日本の小学校で外国出身の保護者が抱く違和感と不適応
—スリランカ人保護者の内面を探る P A C 分析を通して—

S.M.D.T. RAMBUKPITIYA、久留米大学、日本

日本語支援が必要とされる外国にルーツを持つ児童が増加しており、その対策が検討されている。ところで、彼らの親である日本語を母語としない外国出身の保護者（外国人保護者）が日本の学校現場で直面している問題については、さほど表面化されていない。彼らが不安のない日本生活、彼らの子供が安心して学校生活を送るには、外国人保護者の学校文化を理解することによる関わりが必須である。

そこで本研究では、日本在住のスリランカ人保護者を対象に、潜在的意識を測定するのに適した PAC（個人別態度構造）分析を行い、日本の学校生活において彼らがどのような違和感や困難を抱いているのかを検討し、学校と関わり、教師、日本人保護者、他の児童とのより良い関係を構築していくためには、日本語教育や多文化共生の視点からどのような対策や支援が必要かについて考察する。

調査の結果クラスター1から、外国人保護者の日本語力が、学校との関わりや関係を大きく左右する要因となっていることがわかった。クラスター2から、入学年齢や時期の違い、着る物の不揃い、週ごとに変化する時間割、曜日によって異なる持ち物とそれらの量の多さ、度々起きる下校時間の変化、学校行事における風習・マナーの差などで、外国人保護者が日本の学校文化に対して違和感や困難を覚えていることがわかった。これらへの解決・対策として、単なる日本語支援ではなく、学校現場における様々な場面を取り上げた上でそれらの場で必要とされる日本語支援の提供、学校における様々な風習のわかりやすい説明や提示、誰でも対応できるように学校の規則・風習の変更などを提案する。

「漫才ワークショップ」による学生の学び
—言語を相対的に捉えるネタ作りと即興創作体験—

鈴木美加、東京外国語大学、日本
島岡 学、吉本興業、日本

本発表は、2020年度大学学部授業科目「メディア日本語:メディアとメッセージ」においてオンライン形式で実施した「漫才ワークショップ」の実践と学生の学びについての分析を行うものである。日本語母語話者と非母語話者が履修する本授業では、多様なメディアとそれらを通して伝えられるメッセージを考える機会を提供しているが、COVID-19による授業全面オンライン化という状況で、自ら主体的にメッセージをつくる活動として、授業1回(90分)でオンライン漫才ワークショップを取り入れ、実施した。

ワークショップはオンライン同期型 Zoom により行い、1 ミニ講義:漫才入門と多言語漫才ネタ紹介、2 コンビ名決めと紹介、3 漫才作りと発表、により構成されていた。学生ペア(コンビ)は、Zoom のブレイクアウトセッションで自動(ランダム)で設定し、日本語母語話者ペアは英語による漫才を、日本語非母語話者ペアおよび日本語母語話者・非母語話者ペアは日本語による漫才を即興で創作し、クラス内で披露した。各ペアによる漫才作りの時間は正味 10 分であったが、言語や文化の一側面をあぶり出す、非常にユニークな漫才が発表された。ワークショップにおける学

生の学びとして、1 母語や学習言語を相対的な視点で捉え、漫才づくりに生かす機会となったこと、2 発信側として日本語あるいは英語での漫才を作り、演じる経験を通して、漫才作りの楽しさや満足感を得ると同時に、多言語による漫才の可能性を実感することにつながったこと、が挙げられる。

今回のシンポジウムでの発表では、上記の報告に加え、実施の際の留意点や工夫についても参加者の皆さんと考えてみたい。

コロナ時代の新単語 — 日本語とルーマニア語を中心に

Anca FOCȘENEANU, University of Bucharest, Romania

本発表では、2020 年以降コロナウイルスの危機が言語にどのような影響を与えたかを分析する。様々な資料を検討すると、世界中の言語に *social distance*, *coronababies*, *unmute* などのような多くの新語が現れたことに気づく。英語からの外来語も多いが、各国各文化による造語も非常に興味深い。例えば日本語のアベノマスク、ルーマニア語の *izoletă*, フランス語の *coronapiste* などが挙げられる。

分析では日本語とルーマニア語のケースを取り上げる。データの資料としてメディア、ソーシャルメディア、辞書などを使用する。コロナ用語の出現を分析するため、まず両言語の 2019・2020・2021 年のデータを提示し比較する。

次にデータを語源、文法的特徴、意味、用法などの観点から分析する。外来語か造語か、単純語か複合語か、独立語か接尾辞・接頭辞であるかを見る。またコロナ関係の用語を医学だけではなく社会のすべての分野に見ることができたことを述べる。

発表の後半では特に教育・研究などの分野で使用されるコロナ用語に焦点を当てる。言語面から分析するとコロナ用語は非常に豊かで、現代社会の思想を明確に表していると言える。

リアリティ番組『テラスハウス』を使った中級クラス同期型授業の実践報告：
若者言葉とくだけた話し方について学ぶ

**Introducing Slangs and Casual Speech Style into Japanese language classroom
by using a reality show on Netflix: “Terrace House”**

上保文絵、State University of New York at Binghamton, U.S.A.

パンデミック下での遠隔学習の普遍化によって学習環境が多様化してきた一方、留学規制が続く中、学習者が実生活で同年代の母語話者の会話に触れる機会は限られている。しかし、近年の動画配信サービスや SNS の普及により、学習者と教育者の両方にアクセス可能なメディアは、アニメや漫画だけでなく、リアリティ番組やコミックエッセイなど幅広いものとなっている。

本発表では、そうしたメディアを積極的に活用し生教材として授業に取り入れた、同期型授業の実践と成果の報告を行い、改善点を考察した上で、今後の可能性を探る。このコースは中級を対象とした 3 週間完結の短期のコースで、主な目的は、役割語や方言など、時間の制約により普通の授業では触れる機会の少ない日本語の多様な側面を、マルチメディアを主な教材として紹介することである。

その中の一つである「若者言葉とくだけた話し方」のユニットでは、リアリティ番組『テラスハウス』を扱った。この番組では、くだけた話し方がよく使われていることや、学生と年代の近い男女六人が同じ家でシェアメイトになり生活するといった内容から、談話的、文法的な特徴を学生が知るという目標に役立つと考えたためである。Pre-activity として、会話の一部のディクテーションをし、In-class activity でくだけた話し方の特徴を学生がそのスクリプトの中から見つけ、Post-Activity では、学生がテラスハウスの住人であるという設定でロールプレイを行った。

発表では、授業後のアンケートをもとに、今後の改善点や、学生のニーズを分析した結果を報告する。さらに、学生の Multimodal communicative competence を育成するためのアプローチと、生教材を使ったオンライン授業の可能性を考察し、今後の指導への示唆とする。

16:00 – 17:30 基調講演

空間概念のウチとソトはどれだけ日本語と日本文化を説明することができるか。

牧野成一、Princeton University, U.S.A.

この講演ではまず「ウチ」と「ソト」が日本語での意味と音声、母語と非母語などの対立でどのように使われているかという問題から考えはじめ、それに深入りし、日本語の文法と意味がいかにウチとソトと関係しているかを認知のちがいとして捉える。言語も文化であるが、ここでは非言語文化を取り上げる。ウチとソトの関係でおもしろいのは日本人が2月3日の「節分の日」に炒った豆を鬼に向かって投げながら、「福はウチ、鬼はソト」と叫ぶ儀式の意味をまず考える。

**How much spatial notions of *Uchi* (inside) and *Soto* (outside)
can explain Japanese language and culture?**

MAKINO Seiichi, Princeton University, U.S.A.

In my lecture I will first discuss how meaning and sound, native and non-native are opposed to each other and go further to discuss native vs. non-native language and native language use of language. Within culture very interesting things will occur when *Setsubun* ceremony takes place. It is based on *Shintō* religion and it occurs right before another new season begins. People will start to throw broiled beans saying “*Fuku wa uchi, oni wa soto*” (“Happiness inside, Demons outside!”)

3月12日（土）

10:00 – 12:15 一般発表3

漢字字源のメタファーを基にした字義拡張の漢字語彙教育への応用

徳弘康代、名古屋大学、日本

漢字教育では漢字の字源を用いた指導が広く行われている（象形文字：山・川・車など）。しかし、それは漢字一字の指導にとどまることが多く、それを漢字語彙教育に発展させることはあまり行われていない。漢字には象形やその組み合わせから具体物を表し、さらにそれを比喻として抽象概念を表す言葉へと発展していくものが多くある。例えば、「水」を横に倒して書いたものの下に「皿」を加えた字が「益」である。これは、皿から水が溢れている様子を表すが、ここから溢れるほど増す（益す）という意味になり、さらに字義が拡張して、もうけ、効き目といった意味になり、「利益」、「有益」という語へと発展する。漢字の意味が発展し、多義であるということは、具体的にはその漢字が語となって、他の漢字と組み合わせられてその漢字自体の意味を増やしていくことである。この具体物から抽象概念への字義の拡張を活用した語彙指導は、学習者の語彙を増やすことを容易にするのに役立つであろうと考えられる。さらに、メタファーを用いて具体物から抽象的概念が生れてくる過程を学ぶことによって学習者の抽象的思考能力を伸ばすことにも寄与することが予想される。アカデミック日本語教育等では論理的思考が重視されているが、それとは異なる思考方法として、比喻から発展した抽象的思考があり、それは、論理的に積み上げるのとは別の直感的理解や閃きに通じる重要な思考方法であると思われる。本研究では、上記のような字義の展開がみられる漢字を約 2,000 字の中から調査、抽出し、それらの漢字を含む語彙から日本語教育に有用な語彙を選定し、漢字の字源と字義の拡張を語彙の解説とともに記した資料を作成する。

カタカナ語学習の観点から見た初級・中級教科書の分析

小木曾左枝子、立命館大学、日本

日本語学習者が直面するカタカナ語やカタカナ外来語の学習上の困難点として、「発音のズレ」、「表記のゆれ」、「意味のズレ」、「和製英語」、「縮約語または短縮語」、「動詞化・ナ形容詞化」、「非外来語のカタカナ表記」、「和語・漢語・外来語の類語」（望月，2012，pp.8-10）などが挙げられる。これらの困難点を指摘するカタカナ語に関する研究が数多く存在する一方、実際の教育の現場でカタカナ語学習のために活用できる教科書の数は限られている。カタカナ語に特化した教科書も存在するが、その多くがテーマやトピック別に学習を進める形式のものや日本語能力試験対策の一環としてカタカナ語を学習するといったものが多い。カタカナ語やカタカナ外来語の理解や運用は、日本語学習を始めたばかりの入門期の学習者だけでなく、ある程度学習が進んだ中上級レベルの学習者をも悩ます。また、グローバル化や社会の変化に伴い、カタカナ語やカタカナ外来語が増え続ける中、学習者が感じる困難を考慮しつつ、カタカナ語学習を促進する方法はないのだろうか。本調査では、カタカナ語の体系的な学習を考える第一歩として、初級・中級レベルの総合教科書にどのようなカタカナ語やカタカナ外来語が出現しているかを分析する。そして、その結果から総合教科書を使用する中でどのようにカタカナ語学習に焦点を当てて指導することができるかを考察する。

参考文献

望月通子（2012）「基本語化を考慮したカタカナ外来語の学習と教材開発：その振り返りと新たな開発に向けて」『関西大学外国語学部紀要』，6，1-16.

多民族が共生する西アフリカベナン共和国における日本語聴解教材の開発

山道昌幸、IFE FOUNDATION、日本
大石有香、たけし日本語学校 日本

1. ベナン共和国の特徴

ベナン共和国（以下、ベナン）は、アフリカ大陸のサハラ以南の西側に位置し、人口 1,118 万人の国である。首都は海岸線にあるポルトノボであるが、そこからほど近いコトヌーという都市に IFE 日本語学校がある。ベナンの公用語はフランス語であるが、SILInternational（2019）によると土着言語は 50 あり、その中でも特に話者人口が多いのは、山瀬（2010）によると、フォン語、ヨルバ語、バリバ語、アジャ語、グン語、アイゾ語の 6 言語であり、フォン語話者はベナン全体の人口のうち、4 分の 1 程度と、言語別では最大の割合を占めている。IFE 日本語学校はこのような環境の中にある。

2. 日本語学習教材（入門期）の開発

2014 年に、「un dokpe nu mau（邦題：おかげさまで）」というフォン語を媒介語とした日本語学習用聴解教材を制作した。

日本語を独習するための教材は数多いが、ベナンには次のような事情がある。公用語はフランス語だが、日本語学習者、日本語学習希望者にはフランス語が身近ではなく、土着の言語のみを使用する者も多い。しかし、土着言語を媒介とした日本語学習教材が存在しなかった。土着の言語を媒介語とすれば、それを母語として、またはリングフランカとして使える者であれば、日本語学習が始められるのだ。そうして、まずはベナン側の制作協力者の母語であったフォン語を媒介語として教材制作した。

Learning and Teaching Business Japanese: knowing yourself process

Marcella MARIOTTI, Ca` Foscari University of Venice, Italy

西田翔子、Ca` Foscari University of Venice, Italy

The Presentation will be centered on the needs of Japanese Language students approaching the business world. Gathering data from companies and from our own Business Japanese classes, we created specific materials and lessons for job-seeking students.

We will present the construction and aims of the book “Giapponese per il Business” (Mariotti 2019), the development of Jalea Business e-Learning tool (Mariotti 2020) and its employment during Business Japanese classes in an Italian University. We will also show how these tools could open the way from ‘memorizing centered one way classes’ to ‘interactive and critical classes’. We will address the project *Virtual “ryuugaku” for real interactions and job-hunting: supporting Covid online teaching of Japanese language oral and written production skills* as the most fruitful result. Lastly, we will discuss some further points to be improved in our teaching activities for Japanese for business purposes.

13:15 – 15:00 一般発表 4

帰国後の日本語学習の継続に関わる動機付け

—ルーマニア人日本語学習者 2名のケーススタディ—

良永朋実、東京大学日本語研究センター、日本

外国語学習を開始・継続するためにはなんらかの動機付けが必要であり、日本語教育の分野においても様々な動機付け研究が行われてきた。しかしながら、日本留学を終え帰国した学習者に着目した研究は少ない。そこで本研究は、日本語学習者が日本から母国に帰国したのちに、彼らの日本語学習に対する動機付けや日本語学習に求めるものがどのように変化するかを明らかにすることを目的とし、ルーマニア出身の日本語学習者 2名を対象にインタビュー調査を行なった。

調査の結果、彼らはルーマニアに帰国しても1日本語学習を続けたいという気持ちには変化がなく、2日本にいた時のような学習の機会はないものの、可能な範囲で学習を継続しており、3日本人や日本で知り合った人々との交流の際に日本語を使用しているという現状が明らかになった。また、日本語の使用機会や必要性がほとんどないにもかかわらず日本語学習を継続できているのは、4日本や日本人とのつながりを求め、5これまでに築いてきた日本人との関係を維持したいと望んでいるからだという。これらは Gardner & Lambert (1959) が述べている統合的動機付けであると考えられ、学習動機を継続させ日本語を上達させるためには、統合的動機付け、その中でも目標言語の社会との交流が特に重要であることも明らかとなった。という Gardner (1895) の主張を裏付けるものである。また5と6の動機付けは日本に留学していた期間の後半から持ち始めたものであり、帰国後にはさらにその度合いが強くなったという。さらに、帰国しても6日本語や日本語学習は自身の大切な一部であり、7今の自分を表現するために必要なものであるという、アイデンティティに関わる考えを持っていることも明らかとなった。

日本語能力レベルの変化と発音の習得過程

—モスクワの大学で日本語を学習するロシア人の場合—

小熊利江、Ghent University, Belgium

本研究では、モスクワの大学で日本語学を専攻するロシア語母語話者を対象に、日本語の発音の習得状況を調査した。横断的な調査の結果、日本語能力が上級レベル以上の学習者は、中級レベル以下の学習者と比べると発音の習得状況に差異が認められ、発音に関する習得段階が異なる可能性が示唆された。また、学習者は日本語能力が中級前半レベルから中級レベルに向上する過程において、一時的に発音の自然さが低下する現象が見られた。この現象は、第二言語習得過程における近似化のプロセスである音韻の範疇化プロセスによる可能性がある。

さらに、これらの現象について縦断的な調査を行い、個々の学習者の実際の習得過程を観察して検証を試みた。中級前半レベルから中級レベルへ向かう過程での一時的な発音の自然さ低下については、調査の時期が日本語レベル向上のタイミング

に合わず検証することができなかった。一方、中級レベルから上級レベルへと発音評価の向上した学習者を観察したところ、発音の自然さの評価が向上または評価が高い状況が見られた。ただ、日本への留学前に中級レベルだった学習者が留学後に上級レベルに変化した場合については状況が異なり、発音評価があまり高くない現象が見られた。モスクワでの学習による日本語能力向上と、日本留学による日本語能力向上とでは、発音習得に関して異なる要因があると考えられる。

「と来る」の意味用法について

池田 諭、**Université Gustave Eiffel-Paris-Est ESIEA Laval, France**

「来る」は次の例文(1)に見られる様に、発話者が発話する場所への移動を表す動詞とされ、主に「行く」と対比されながらかなり以前から研究され、既に優れた研究がある。

(1) 人が来る。

この様な分析では直感で捉えやすい空間的用法が優先し、捉えにくい非空間的用法は余り分析されず、派生的な用法、抽象的な用法とされているように思われる。これは辞書等での記述も同様なようである。確かに具体的なものから抽象的なものへの移行は教育的で、即ち説明し易く、便利であると思われる。では「と来る」の形で現れる次の様な例文はどう説明したらいいだろうか。

(2) 山田さんと 来たら いいでしょう。

(3) 山田さんと 来たら 本当に 困った人だ。

(4) この店は駅から近い、更に 安いと 来ている。もう最高だよ。

(2)は(1)と同様に発話者への移動で説明されるが、(3)は移動ではない。辞書等では「ある物事を特に取り上げ強調して言う意を表す。特に…の場合は。…について言う」と言う説明であるが、ではどの様に(2)から(3)を説明できるだろうか。更に今まであまり関心を引かなかった(4)はどうだろうか。発表では各用法を詳しく調べて統一的な説明の可能性を探りたい。更に教育的説明の在り方を考えたい。

15:30 – 16:30 基調講演

21世紀に求められるビジネス日本語の教育

高見智子, University of Pennsylvania, U.S.A.

従来、ビジネス日本語教育と言えば、日本企業への就職支援を目的にしたコースが主流であった。しかし、日本企業への就職・日本での就職がほぼ実現性のない日本国外での環境でも、そのようなコースづくりは妥当であると言えるだろうか。本講演では、まずビジネス日本語教育についての概説をし、新しいビジネス日本語教育の必要性を提案する。次にアクトフルから2011年に提唱された21世紀型スキルの育成をカリキュラム開発に取り入れた、21世紀に求められるグローバル人材の育成に目標をおいたビジネス日本語カリキュラム例を紹介する。そして21世紀に求められるビジネス日本語の教育の意義と可能性について議論したい。本講演の議論が、ルーマニア・ヨーロッパ・その他の地域からの学会参加者にも通底するものであり、参加者それぞれが現場でのビジネス日本語教育の意義や目標を問い、これからのビジネス日本語教育について考えていくきっかけを作ることができればと考える。

Business Japanese Education Crucial in the 21st Century

TAKAMI Tomoko, University of Pennsylvania, U.S.A.

Business Japanese language courses have mainly aimed at supporting its students to find a job at a Japanese company or to be employed in Japan. However, would it be sufficient to design such courses outside of Japan where employment with a Japanese company or employment in Japan is almost impossible? In this lecture, I will first outline business Japanese education and propose the necessity of a new business Japanese education. Next, I will introduce an example of a business Japanese curriculum designed to cultivate global professionals required in the 21st century, incorporating 21st-century skills proposed by the ACTFL in 2011. In

conclusion, I would like to discuss further the significance and possibilities of business Japanese education required in the 21st century. It is hoped that the discussion is relevant to the participants of the conference from Romania, Europe, and other regions and helps each participant examine the significance and goals of business Japanese language education and their teaching in their settings.